

## 令和4年度 学校評価 氷上中学校パワーアッププラン

### 1 目標・方針

中期的な学校運営の目標・方針	「地域に誇りを持ち、生涯にわたって学び続ける生徒の育成」 ～地域とともに育む 人とつながり 学びに向かおうとする力～
本年度の重点目標	(1) 生徒の確かな学力の育成に向けた、「主体的な学び」を引き出す授業づくり (2) 不登校生徒を出さない学校づくり (3) 教職員が安心して生徒に向き合える環境づくり

### 2 自己評価 (達成状況 A:優れている B:おおむね良好 C:やや改善 D:要改善)

領域	観点	評価項目	達成状況	学校の取組状況と改善の方策
学校運営	保護者・地域住民との連携	生徒の様子や授業参観、懇談会、学校行事等の案内など、学校の教育活動の情報を学校だよりやHP等で保護者・地域へきめ細かく伝える。	A	学校便り、学年通信、保健だより等で学校の様子を知らせることができ、保護者、教師ともに約80%が肯定的な評価となっている。HPでも「子どもの様子」などで学校行事や授業の様子をきめ細やかに保護者に情報発信することができた。今後も継続して、子どもたちの様子を地域や保護者へ伝えていく。
		保護者・地域住民の方々にオープンスクールや授業参観、学校行事や講演会に参加していただき、地域に開かれた学校づくりを推進する。	B	感染症対策のため、実施できていなかったオープンスクールを3年ぶりに実施できた。学年ごとに時間を区切ったり、参加を家族に限ったりするなど工夫をして、2学期に実施できた。今後は感染対策を工夫しながら、地域の方にも参加していただきやすいようなオープンスクールや行事、また、地域の方をゲストティーチャーに招聘できるように計画していく。
	生徒指導	人権感覚を磨き、いじめを許さず、自他共に「命」を大切にするための指導や活動を充実させる。	B	いじめについてはいじめ防止基本方針をもとに、アンケートや教育相談をふまえて、積極的認知及び組織対応に努めた。生徒会主体の「君を守り隊」も昨年度に続き活動しており、いじめ・暴力防止に向けた活動に取り組んだ。今後も前述の取組はもちろんのこと、教科横断的にカリキュラムを工夫し、人権教育や平和教育も充実させていく。
		不登校生徒減少に向けての取組の推進と充実を図る。	B	不登校支援委員会を毎週開催し、学級担任・不登校担当・SSWを中心に組織的に取り組むことができた。対象生徒は12月末で37人(7.9%)にのぼるが、その内の30人程度(81%)は個人のペースで少しずつ登校できるようになった生徒もいる。一方、別室登校や時差登校を必要とする生徒も増えている。引き続き、関係機関とも連携しながら個別の対応を必要とする生徒への支援を続けていく。
		学校のいろいろな活動の場面で生徒の達成感や充実感を大切に、主体的に活動できる生徒の育成を図る。	B	様々な担当の教師が連携し、組織的に取り組むことができた。また、生徒会役員を中心にあいさつ運動など企画し、生徒自身が日々の生活を改善するために活動することができた。学校行事も87%の保護者が肯定的に考えており、新型コロナウイルス感染防止対策をしながらも、生徒を中心とした活動ができた。来年度以降も生徒自身が達成感を得られる活動を工夫していく。
	安全管理	交通事故の未然防止をはじめ、防災(減災)意識の高揚を図るとともに、安全で安心な学校環境づくりを推進する。	B	定期的な学校施設の安全点検、登・下校時の交通立ち番指導、毎日行うセーフティー丹波号を活用した巡回指導など、生徒が安心して生活できる学校環境づくりを進めている。学期に1回の防災避難訓練では、場面想定を工夫して実施した。保護者アンケートの肯定的評価は、施設・設備の安全管理は97%で昨年度より2%上昇したが、交通指導など安全対策は76%で昨年度から6%減となった。今後も指導の体制や方法の工夫・改善を進めていく。

教育課程	学習指導	基礎学力の定着と学力向上をめざして、家庭学習の充実や個々の生徒に対応した支援に取り組む。	B	生徒アンケートでは、ほぼ毎日、家庭学習を1時間以上できている割合が42%で、昨年度より8%減少している。家庭学習の進め方については生徒同士が交流できる場を設定し、上手くまとめているノートを紹介したり、テスト期間中の取り組みのスケジュールをアドバイスさせ合ったりするなど、取り組む方向性が分かり易くなるようにして前向きに取り組めるようにしていく。個々の生徒に対応した支援については、定期テストの学習相談や頑張りタイムを行うことで、多くの生徒が参加している。今後も継続していく。
		授業内容の充実と改善を図り、全職員で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて課題に興味を持ちながら主体的に取り組む。	C	「探究的な学びの創造プロジェクト事業」の指定を受け、教科および総合的な学習の時間に探究のプロセスを取り入れ、生徒自身が「主体的・対話的で深い学び」を追求できるように工夫している。アンケートでは、「楽しくわかる授業」について、生徒の肯定的回答が5%減少しており、今後も生徒の学習状況・学習意欲の実態把握・分析や、学習相談、学習支援のさらなる充実を図っていく。
課題教育	特別支援教育	特別支援教育の推進や支援の必要な生徒に対するきめ細かな教育の推進と充実を図る。	C	特別支援教育委員会を定期的に開催し、在籍生徒の情報交換や課題等を協議している。教職員アンケートでは、特別支援教育の共通理解に関して72%の教職員が肯定的な評価をしているが、昨年度より減少している。今後、委員会での協議内容や確認事項を教職員全体の共通理解とし、個別の対応を必要とする生徒への支援につなげていく。

### 3 学校関係者評価

- ・PTA活動では、コロナ禍ではあるが、年間計画において、できるところから進め、年度当初の計画案のほぼすべてを実施することができた。
- ・R4年度のトライやるアクションでも見られたような、小中連携を基本とした取組をさらに進めていただきたい。
- ・各小学校運営協議会との連携のもと、より一層の小中連携を期待する。
- ・地域に開かれた学校づくりを進めるとともに、地域人材の積極的な活用に期待する。
- ・年度当初に比べ、地域において挨拶が活発にできるようになってきたのではないかと考える。これは、生徒会を中心とした挨拶運動の成果と言えるのではないかと考える。引き続き、地域側からも積極的に挨拶をしていきたい。
- ・学校が落ち着いてきていると感じる。
- ・生徒の「主体性」の伸長のためには、やるべきことに対して、生徒自らが主体的に「やってみよう」とならないと難しい。その工夫が求められているのではないかと考える。
- ・個々の生徒がそれぞれの個性を大切にしながら主体的になればなるほど、個別の対応も増えることが予想される。教職員の負担も増加することから、より組織的で協働的な働き方を意識していくことが大切と考える。
- ・例えば「トライやる・ウィーク」の地域コミュニティへの受け入れ等、地域と学校の連携による協働的な教育活動の展開が必要ではないかと考える。
- ・登下校時の挨拶ができるようになった。「安全」は「安心」の上にあるもので、安心できる生活を送ると安全に過ごせるのではと感じる。
- ・個別の対応の増加に伴い、働き方改革に向けた意識改革が益々必要になってくることが予想される。
- ・生徒個々の特性や、支援の在り方が多様化する中で、地域やコミュニティ・スクールの立場からどのように連携できるか、今後の課題であろう。
- ・生徒同士が協働による学習を進めることが望ましい。
- ・個に応じた学習のやり方指導に期待する。そのことが、生徒一人ひとりの居場所づくりにもつながると考える。
- ・地域の人材を積極的に活用する方向の探究活動を期待する。

### 4 次年度の改善の方向性

- ①不登校や不登校傾向を含む、個別の支援が必要な生徒に対する教職員の組織的指導体制の充実・強化の観点  
(生徒の「居場所づくり」のため、内面理解に基づく人権基盤の生徒指導を推進し、一層の教職員間連携を図る。)
- ②生徒の「学力向上」に向けた、教員の「授業力向上」の観点  
(生徒の「主体的な学び」を引き出すため、探究のプロセスを取り入れた授業づくりと学び方の工夫を進める。)
- ③個々の生徒に対する学習支援の観点  
(生徒の学習状況や学習意欲の実態把握と分析を進め、学習相談や学習支援のさらなる工夫・充実を図る。)
- ④小・中連携の観点  
(コミュニティ・スクールを土台に、工夫して、更なる小中連携を進める。)

令和5年3月16日

学校名 丹波市立氷上中学校  
校長名 吉川景敏

